

# Bloom!

東京医科歯科大学広報誌

## 大学解剖 特集

学長からの  
メッセージ  
歴史と機構図  
から見る医歯大



### 明日の扉：診療室訪問

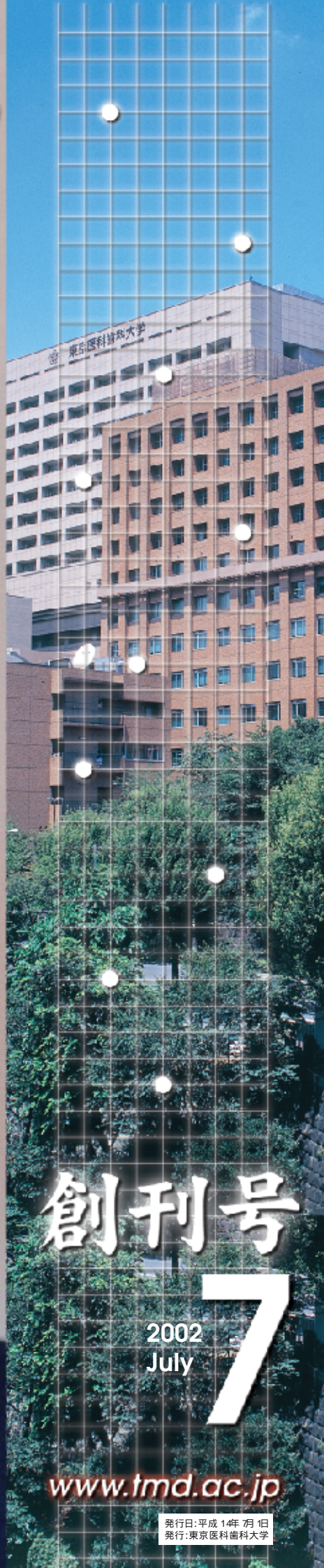
感覚・皮膚・運動機能診療部門(皮膚科) / 西岡清  
育成系診療科 矯正歯科外来 / 相馬 邦道

### マイリサーチ

免疫の不思議を解きあかす / 烏山 一  
細胞の情報伝達メカニズムを知る / 一條 秀憲

もっと知りたい! 東京医科歯科大学  
四大学連合 / 入学状況 / 留学生センター  
/ 教養部 田中 智彦・勝又 敏行

学長 鈴木 章夫



# 創刊号

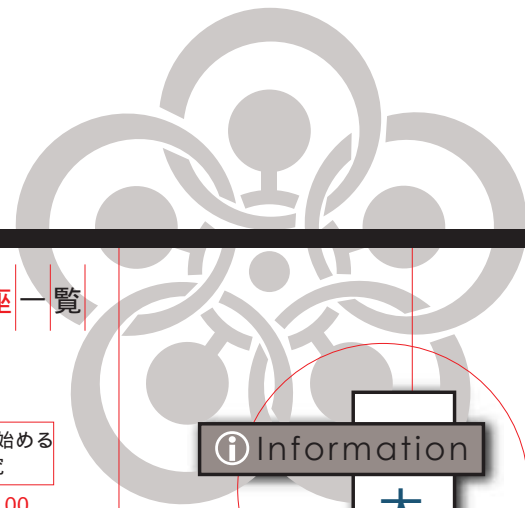
2002  
July

# 7

www.tmd.ac.jp

発行日:平成14年7月1日  
発行:東京医科歯科大学

東京医科歯科大学広報誌 Bloom! (グループ) 第一号 2002年7月 編集 / 東京医科歯科大学広報委員会 発行 / 東京医科歯科大学総務部総務課 〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45 03-5803-4530 FAX03-5803-0273



### 公開予定講座一覧

#### 子供自然科学公開講座

8月20日(火) ~ 8月21日(水)  
「なぜ?」から始める  
理科の自由研究  
10:00~16:00

#### スポーツ公開講座

8月19日(月) ~ 8月23日(金)  
みんなと泳ごう、  
ジュニア水泳教室  
Aコース 9:00~12:00  
Bコース 13:15~16:15

問い合わせ先 / 教養部厚生掛 TEL 047-300-7106  
受付期間 / 平成14年7月1日(月)~17日(水)

### Information

大学インフォメーション



### 平成15年入試情報

各試験の実施日程(実施場所)  
学士編入学試験(湯島地区) 対象学部学科 / 医学部医学科、歯学部歯学科  
出願期間 / 平成14年6月5日(水)~14日(金)  
第1次選考発表 / 平成14年6月28日(金) 第2次選考 / 平成14年7月8日(月)  
第3次選考 / 平成14年7月2日(月)  
3年次編入学試験(湯島地区) 対象学部学科 / 医学部保健衛生学科  
出願期間 / 平成14年8月1日(金)~2日(木) 学力検査 / 平成14年9月1日(木)  
面接 / 平成14年9月13日(金)  
推薦入学試験(湯島地区) 対象学部学科 / 医学部保健衛生学科看護学専攻  
出願期間 / 平成14年11月1日(金)~7日(木)  
第1次選考発表 / 平成14年11月1日(金)  
第2次選考 / 平成14年11月2日(月)  
大学入試センター試験(代々木ゼミ) / 平成15年1月18日(土)~19日(日)  
本学個別・出願期間 平成15年1月2日(月)~2日(水)  
前期日程試験(代々木ゼミ・湯島地区) / 平成15年2月2日(火)~2日(木)  
後期日程試験(湯島地区) / 平成15年3月12日(水)~13日(木)  
私費外国人留学生入学試験 出願期間 / 平成14年12月9日(月)~16日(月)  
学力検査(代々木ゼミ) / 平成15年2月2日(火)  
面接(湯島地区) / 平成15年3月12日(水)

#### 【タイトルの由来】

タイトルの「bloom」とは、集会的な花を指す以外にも、開花期や花盛りといった意味があります。そんな、はつらつとした明るい雰囲気、気分の広がりを感じて皆様にご愛読頂けるようにとの思いが込められています。

### 編集後記

新広報誌「Bloom」創刊号をお届けします。これまでの「医歯大ひろば」から大きく様変わりして驚かれた方もおられるでしょう。サブタイトルに「発信医歯大ニュース」とあるように大学外の方々に本学の情報を発信して伝えることが新広報誌の使命です。もちろん学内の方々にも楽しんでいただけます。東京医科歯科大学のシンボル白梅が花開き香りが感じられる「Bloom」、大事に育てたいと思います。皆様のご支援を宜しくお願いします。

(広報委員会委員長 大谷 啓一)

TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY

#### 【ご意見・ご要望】

広報委員会では、創刊号についてのご意見・ご要望をお待ちしています。  
ホームページ <http://www.tmd.ac.jp>  
Eメール [hiroba@tmd.ac.jp](mailto:hiroba@tmd.ac.jp)



広報委員会委員長 / 大谷 啓一  
広報委員会 / 三浦 修 宮本 真巳 一條 秀憲 畔柳 和代 山下 仁大 北嶋 繁孝 渡橋 正博

現在  
大学院の重点化の完成



東京医科歯科大学長  
すずき あきお  
鈴木 章夫

医学部の中に設立されている保健衛生学  
科は大学院の重点化にともない、教育・  
研究両面において体制を充実しています。  
大学は全教職員一丸となって、世界に  
通じる医歯系総合大学を目標に努力して  
います。

昭和3年創設の歯学部は、国立大学最  
古の歴史と伝統を持ち、歯学教育・研究・  
診療においては他に類例のないことは良  
く知られています。昭和19年設立の医学  
部医学科は、優れた教授陣を有し、21世  
紀の高度先進医療等、日本の臨床医学の  
メッカとなるように実績を積んでいます。

東京医科歯科大学は、医学部医学科、  
医学部保健衛生学、歯学部歯学科、教  
養部、生体材料工学研究所、難治疾患研  
究所を有する日本唯一の医歯系総合大学  
院大学です。  
本学は良き医師・歯科医師・コ・メデ  
イカル人はもちろんのこと、一流の研究  
者・指導者の養成を志しています。  
その教育理念は、第一に将来の医療人  
としての幅広い教養と豊かな感性を備え  
た人間性の育成です。第二に自己問題提  
起、自己問題解決型の創造的人間の養成  
です。第三に国際性豊かな人材の国際的  
競争に耐える人材の養成です。

学長からのメッセージ

我が国唯一の  
医歯系総合大学  
東京医科歯科大学

平成12年4月  
大学院保健衛生学研究所の設置

平成11年4月  
大学院医歯学総合研究科に改組、生体材料工学研究所に改組

平成元年4月  
医学部保健衛生学新設

昭和48年9月  
難治疾患研究所開設

昭和41年4月  
医用器材研究所と改称

昭和40年4月  
教養部設置



国府台病院 (1953)



霞ヶ浦 / 予科 (1946)



現在の東京医科歯科大学所在地周辺 (1897)



昭和23年頃の本館 (現在の2号館)



東京医科歯科大学の前身である  
東京高等歯科医学学校初代校長  
島峰 徹先生

昭和3年10月12日

大学全景 (1959)



昭和30年4月  
医学歯学進学課程の設置(新制医歯学系大学の6年制が完全実施)  
大学院医学研究科・大学院歯学研究科の設置

昭和26年4月  
(新制)東京医科歯科大学  
最初の附置研究所として歯科材料研究所の設立

昭和21年8月  
(旧制)東京医科歯科大学へ昇格

昭和19年4月  
東京医学歯学専門学校と  
改名(医学科設置)  
当時の入学定員  
(医学科80名 歯学科80名)

昭和5年12月  
現在地へ移転

昭和4年4月  
第1回生100名の  
入学宣誓式  
東京高等歯科医学学校  
附属病院設立

昭和3年10月12日  
本学の前身である  
東京高等歯科医学学校  
創立  
(10月12日は本学の創立記念日)

大正11年1月  
歯科医師附属病院  
大正7年6月  
文部省歯科医師試験  
病院と命名

大正6年8月  
歯科医師開業試験  
附属病院  
明治30年  
東京医術開業試験  
附属病院  
(通称 永楽病院)

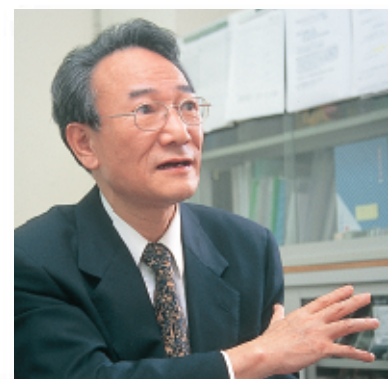


診療室訪問

感覚・皮膚・運動機能診療部門  
皮膚科

大学院医歯学総合研究科 環境皮膚免疫学 教授

医学部附属病院長 にしおか 西岡 きよし 清



一人ひとりの原因を特定して  
本来の皮膚へ戻るのが当科の役目

私が皮膚科医になった30年以上前には、アトピー性皮膚炎は子供の病気でした。個人差はあるものの、ほとんどは年齢とともに自然治癒するものだったのですが、現在では成人しても炎症が続いたり、成人してから発症するという方が増えています。

皮膚の過敏性と免疫異常

アトピー性皮膚炎を起こす根本的な原因として、皮膚の過敏性と免疫異常があげられます。前者は皮膚環境の変化などにより、健康な人が感じない程度の化学的、物理的な刺激に対しても痒みなどを引き起こす状態です。後者はアレルギーにより、免疫抗体生産が増強し、皮膚症状が悪化する状態です。これら両方の場合も背景には遺伝的な要因が関わっており、すでにアトピー関連遺伝子が発見されています。しかし、これらの遺伝子に異常があれば症状が出るというわけではなく、環境因子が作用してはじめて症状がでるのです。

現代の皮膚環境の変化

昔と比べ、アトピー性皮膚炎が成人にまで広がるようになった、現代の皮膚環境の変化について、日々の生活を例にあげてみますと、入浴もシャワーだけで済ませてしまったり、入浴もシャワーだけで済ませてしまったり、乾燥してしまったり、そして身体を洗うにしても、泡で汚れを落とさずに高濃度のせっけんやボディスチャンプで肌を傷つけてしまっている。また、オフィスでは一年中エアコンがつけられていることで、皮膚の機能が低下していきます。それらが原因と気付かず、皮膚に対しての刺激が繰り返されています。

アトピー性皮膚炎にもいろいろなタイプがあり、それらをきつちり区別して考えなければなりません。当院でも、いらっしやる患者さんの一人ひとりの原因を探求し、

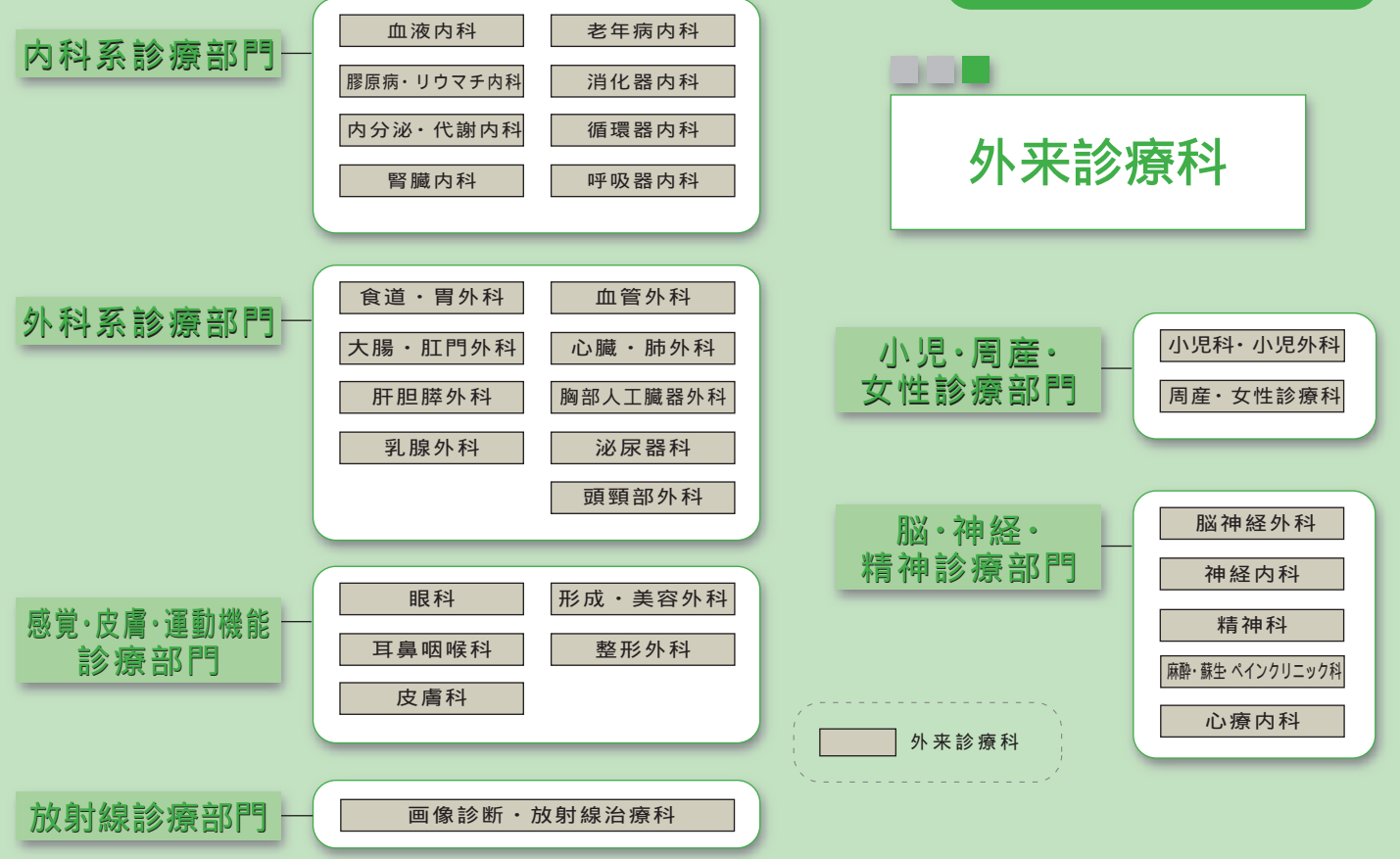
同じアトピー症状だからといって同じ薬を処方するのではなく、それを引き起こす原因を究明して、それを取り除く作業を行っています。実際、その原因となるものを取り除けば、皮膚は2週間ほどで回復します。自然治癒の力はそれだけあるといえます。原因を取りのぞかなければ、たとえステロイド剤で今出ている症状をおさえても、因子を与え続けていけば、ステロイド剤も効果がなくなってしまう。そしてただ単に、ステロイドで症状をおさえるのではなく、ステロイドでも原因を探し出すのが最大の目的です。私たちは回復を早めるための治療を根気よく行い、一人ひとりの原因を特定して本来の皮膚に戻していくのが当科の役目です。そのためには患者さんの症状や生活環境を細かく聞き出し、いろいろなアプローチを行います。決して短期間で終わる治療ではありませんが、私たちのところに来る方のうち、治療期間は人それぞれですが最低3年から5年で70%〜80%の方は改善しています。また、アレルギーについては、現在はアレルギーを避けるしか方法はありませんが、遺伝子操作による新しい薬の研究が進められています。

幅広いアプローチから原因発見へ

当科にはいろいろな症状の方が数多くいらっしやいます。それだけ多くの患者さんと接しているからこそ、一人の患者さんに対して幅広いアプローチができるのです。そのアプローチを通して、自分の生活環境を見直し、原因を見つけてそれを取りのぞく努力をすることがアトピー性皮膚炎の治療で最も大切なことなのです。

医学部附属病院

外来診療科

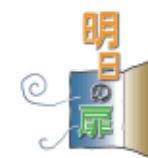


受付の手順

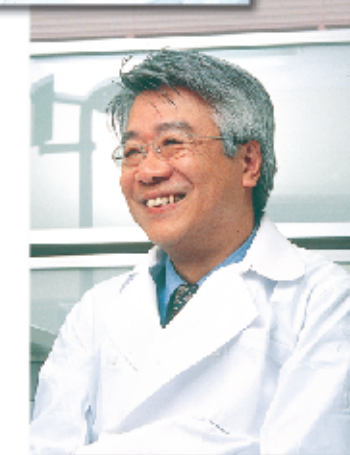
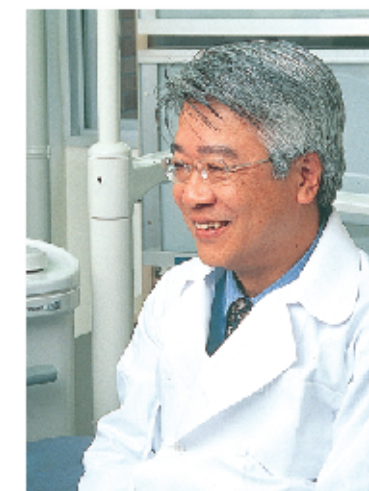




診療室訪問



育成系診療科 矯正歯科外来  
 大学院医歯学総合研究科 咬合機能制御学 教授  
 相馬 邦道



健康な歯に戻し、  
 歯の美しさと質の両面を高めていく



近年、矯正歯科を受診する大人の割合が増えています。その理由としては、日本人のインテリジェンスが高くなり、質を求める人口が増えたこと、それに答える歯科材料・治療技術の進歩があげられます。東京医科歯科大学附属病院矯正歯科外来では、同大学院の多くの分野と密接に情報を交換して研究開発を行い、世界に誇る技術を用いて治療を行っています。

先天異常を持った方々も多く、当科は最終的な駆け込み寺となっているようです。従来、矯正歯科は唇顎口蓋裂、顎変形症を除き保険診療ではありませんでした。しかし今年4月に保険診療が改正され、第一・第二顴弓症候群、鎖骨頭蓋異骨症、Crouzon症候群、Treacher-Collin症候群、Pierre-Robin症候群、Down症候群が適用疾患として追加されました。これらの保険適用は対象とされた患者さんにとっては福音であったことでしょう。

歯学部附属病院

外来診療科及び  
 専門外来診療科

■ 外来診療科  
 ■ 専門外来診療科

育成系診療科

- 矯正歯科外来
- 小児歯科外来

維持系診療科

- むし歯外来
- 歯周病外来
- 歯科放射線外来
- 歯科麻酔外来
- ペインクリニック
- 頭頸部心療外来

回復系診療科

- 口腔外科外来 (専) 顎顔面外科外来
- 義歯外来 (専) 顎義歯外来
- 高齢者歯科外来 (専) スポ ツ 歯科外来
- インプラント外来 (専) 歯科アレルギー 外来
- (専) 言語治療外来

新しい分野「矯正歯科」

そもそも矯正という領域は、日本で学会が設立されてから75年という新しい分野です。その後、矯正歯科という標榜が認められ、歯科医が自分でできると思えば看板をかけたため、現在では矯正歯科の看板を掲げる歯科医院が社会に存在します。

驚異的な短期間治療が可能に  
 矯正と聞くと、長い年月をかけて太いワイヤーを強引に曲げて治療をしているというイメージはありませんか？ それは、ステンレスワイヤーなどを使い強い力で歯を動かしているからです。当科では、先にも述べたように研究分野と密接な関係があり、そこで弱い持続的な力を発揮するチタンニッケルワイヤーを世界に先駆けて開発しました。このワイヤーを用いることで、通常2~4年かかる矯正も、個人差にもよりますが1~2年と驚異的に短い期間で終了し、歯にとってやさしい治療が可能となりました。

当科を受診した18歳以上の矯正患者の割合は、30年前は約1割、15年前は2割5分、ここ2~3年では約6割となり、半数以上が大人の矯正へと変わってきています。また、コンプレックスや随伴症状、



# 細胞の情報伝達 メカニズムを知る

私たちの体と密接な関係を持つ細胞。その情報伝達のメカニズムをコントロールできれば、多くの疾患の改善が見られるようです。その研究に没頭している一條先生にお話を伺いました。



分子情報伝達学分野  
**一條 秀憲**

私たちの体は、日頃様々なストレスにさらされています。そのストレスを認識して、どのような状況下にあるかを考え、対応しているのが体を構成している細胞です。  
**シグナル伝達による疾患治療**  
その細胞が実際どのようなメカニズムで動いているのかはとも重要な問題となつていきます。なぜなら、細胞の中にあるシグナル伝達（細胞の外からの刺激を、受け取り、それを情報処理してシグナル化し伝えていく）システムが壊れることが分かっており、壊れることで様々な疾患を引き起こす原因になっているからです。そのシグナル伝達のメカニズムを研究することにより、非常に多くの疾患治療に役立つと考えられます。例えば、癌やアルツハイマー病などの神経系疾患、アレルギーなどの免疫系疾患の一部は、細胞の中のシグナル伝達分子

（多くの場合タンパク質）を作るDNAに異常が起きているのが原因です。しかし、個別の疾患に対してどの遺伝子が大事なのかは、まだ十分に解析されていません。その理由としては、多種多様なストレスや刺激に対して、どのような特異性を持ったタンパク質がどのように働いているのかという順番が明らかになっていない為です。それが解明されると、その分子をターゲットとした治療法や予防法が開発できます。そういった点で、私たちが研究しているシグナル伝達は、非常に重要な研究といえます。  
**「ASK1」とアポトーシス**  
私たちは、シグナル伝達分子の「ASK1」という分子を今から5年前に発見し、今でもこの分子を介したシグナル伝達の研究を行っています。それを研究することにより私たちの日常において何に繋がると言えれば、例えば、アポトーシス（細胞が積極的に死ぬ現象）が病気のなかかりで、非常に重要で、一説には、人間の疾患の9割においてアポトーシスが直接の原因となる場合と、間接的原因となる場合があり、そのアポトーシスを医師・歯科医師が自在にコントロールすることに非常に多くの疾患に悩む人々の期待できるのです。  
人間の正常な体は、アポトーシスによってつくり出されたものとも言えます。アポトーシスは彫刻と同じで、ある程度の細胞が固まって出来たところから、細胞が死滅し鼻や口などを形成していきます。御存じ



ひでり  
**一條 秀憲**  
大学院医学総合研究科教授。専門は、分子細胞生物学。研究テーマは、細胞内シグナル伝達。生体材料学の授業を担当。

の方も多いかと思えますが、胎児の時には指の間に水掻きがあり、それも細胞が死滅して初めて指の股ができる。これがアポトーシスです。要するに形作りに必要なメカニズムなのです。また、アポトーシスの引き金をひく分子に異常があると細胞が死滅せずに蓄積されてしまい、癌などの疾患の原因になるだろうと考えられています。逆に、アルツハイマー病などの神経変性疾患は、神経細胞が死んでしまつたために起こる現象です。少なくとも一部の神経変性疾患に関しては、ASK1を活性化してアポトーシスを誘導し過ぎていことが原因のようです。治療として考えられる事は、ASK1の酵素活性を抑える薬を作り、神経細胞の死滅を抑制することです。これは可能なが、実際開発がすすまられていません。また、ストレスに対してすぐに細胞が死んでしまつて困ることもあり、死ぬか生きるかを判断しながら体を構成しているかなくてはなりません。ASK1やMAPKキナーゼ経路（酵素）は、活性化の程度により細胞が生死を決定するための情報処理をしています。そのASK1等の量を管理しているのは、核の中にあるDNAです。そのDNAからタンパク質が作られ、そのタンパク質の発現パターンで細胞の生死が違ってくるのではないかと考えられています。いずれにしてもシグナル伝達機構の詳細な解析が今後の医学・歯科医学の飛躍的な発展につながるものと期待しています。



感染分子制御学分野  
**烏山 一**

# 免疫の不思議を 解きあかす

普段、意識することのない免疫システム。その役割は私たちの体にとってとても重要な役割を持っています。その役割を解明して治療に役立てる研究を行っている烏山先生にお話を伺いました。

免疫システムは大きく分けると自然免疫と獲得免疫の二つに分けられます。私たちの研究室では自然免疫で重要な役割を果たしているナチュラルキラー細胞と獲得免疫で重要な役割を果たしているBリンパ球に、どのようにそれらが誕生し、どのようにして免疫システムの一員として活躍しているのかを研究しています。これらの免疫細胞がきちんと誕生し成熟できないと、この際に、感染症にかかりやすくなったり、悪性腫瘍が発症してしまふといった問題点がでてきます。ですから、局所的に免疫システムをコントロールすることが必要で、今その研究が進められています。  
**免疫とアレルギー**  
免疫システムは大きく分けると自然免疫と獲得免疫の二つに分けられます。私たちの研究室では自然免疫で重要な役割を果たしているナチュラルキラー細胞と獲得免疫で重要な役割を果たしているBリンパ球に、どのようにそれらが誕生し、どのようにして免疫システムの一員として活躍しているのかを研究しています。これらの免疫細胞がきちんと誕生し成熟できないと、この際に、感染症にかかりやすくなったり、悪性腫瘍が発症してしまふといった問題点がでてきます。ですから、局所的に免疫システムをコントロールすることが必要で、今その研究が進められています。



はじめ  
**烏山 一**  
大学院医学総合研究科教授。専門は、免疫学、アレルギー学。研究テーマは、リンパ球の発生・分化・活性化の分子機構。生化学、生体防御、臨床遺伝学の授業を担当。

免疫不全症や白血病といった生命を脅かす病気を引き起こすので、病気の診断や治療という観点からみてもとても大切な研究だと自負しています。  
もともと体を守ってくれるはずの免疫システムが時に本来の仕事から逸脱した行動をとることがあります。最近患者数が増加し、社会問題にもなっているアレルギー疾患はその代表的な例です。例えば、私ものうちの一人なのですが、花粉症を例にあげてみますと、本来まったく無害であるはずのスギ花粉を免疫システムが危険な外敵と判断し攻撃して排除しようとするのです。その結果、くしゃみや鼻水といった症状があらわれてしまふのです。なぜこのような免疫システムの狂いが生じるのかを遺伝子工学や発生工学を応用して研究しています。  
**免疫システムの解明を目指して**  
免疫システムの研究をしていると、誰がこのように巧妙なシステムを考えたのかと感心させられることが多々あります。その設計図はかなりわかってきているのですが、その設計図によってどのように免疫システムがコントロールされているかはまだ謎です。私たちが行っている研究はこの免疫の謎を解明することを目指すものです。それにより、エイズをはじめとする難治感染症や癌、アレルギー、臓器移植など現代医学が抱える重大課題の解決に直結するものと確信しています。

College of Liberal Arts and Sciences 教養部

人間科学

最近、医師や看護師が主人公のドラマをよく見かけます。もっとも、多くはそれこそドラマチックすぎるか逆にあまりに「ミカル」で、「専門医療従事者」歯科医師、看護師、検査技師などをまとめて「**医の世界**」への架け橋と呼びます。の姿としては、「**医の世界**」への架け橋は、みなさんとしては「専門医療従事者になる」とはどいつのことか、学生時代によく理解しておきたいところでしょう。専門の勉強はしたけど医療者としては、「**医の世界**」では「**医の世界**」を笑えませぬ。

教養部で、人間科学教育課程が始まったのもある意味ではそのため、つまり本学に集う未来の専門医療従事者たちに、「医療を「職業」にするとはどういうことか会得してもらったためです。」「ある意味で」というのはこの課程の目標が、「医療人の心得」みたいなものを学ぶことよりもむしろ「深いところにあるからです。そしてその「目標」はこの課程のデザインにも反映されています。」

人間科学教育課程は2つの部門「体験学習部門」と「科学学習部門」からなります。体験学習部門では、医療・福祉関係の方々から話を聞くと同時に夏休みに週間ほど施設で仕事の手伝いをします。でもこれで終わりではありません。というの、ただ「体験」するだけではそれは、一時的「印象」や「感想」にしかならないからです。普通のひとならいざしらず、医療を「職業」にするのであれば、その「体験」

「**医の世界**」にまで高めてゆく「**体験**」の意味をつきつめ、医療について、またそこに現れるひとひととの関係性や「人間」そのものについて、ひいては「自分」のあり方について、考えを練りあげてゆく必要があります。とはいえ、それはひとりではなかなかうまくゆきませぬ。そこで、グループ演習で、「**体験**」を分かち合うことともに、「**科学学習部門**」の出番となります。

この部門は2つの講義「**心理学系、倫理学系、法学系**」からなります。心理学系は、「病めるひとが生きている世界」について理解する道を開いてくれるでしょう。倫理学系では、「**職業としての医療**」にどんな倫理が求められるのかそれが、人間の「あり方」とどう関係するのかわかることができるでしょう。また法学系は、「**医療の世界**」が診察室や病室、手術室に限られるものではなく、実はひろく、社会とつながっていることを教えてくれるでしょう。こうして多様な視点から、「**医療**」と「**人間**」への洞察を深め、「**体験の経験化**」をはかることで、「**専門医療従事者になる**」意味をつかみとり、責任を自覚してゆくことも可能になる。人間科学教育課程はそのための「**場**」であるとしていられるのです。

この課程のそうした「**目標**」を示すキョウトがあります。それは冒頭の「**?**」への応答でもあり、みなさんこの機会にぜひ、その意味を考えてみてください。古代ギリシアの神殿に刻まれていたそのことばはまたソクラテスのキョウトでもありました。汝自身ヲ知シ。



スモールグループでの体験の共有

を「**経験**」にまで高めてゆく「**体験**」の意味をつきつめ、医療について、またそこに現れるひとひととの関係性や「人間」そのものについて、ひいては「自分」のあり方について、考えを練りあげてゆく必要があります。とはいえ、それはひとりではなかなかうまくゆきませぬ。そこで、グループ演習で、「**体験**」を分かち合うことともに、「**科学学習部門**」の出番となります。

この部門は2つの講義「**心理学系、倫理学系、法学系**」からなります。心理学系は、「病めるひとが生きている世界」について理解する道を開いてくれるでしょう。倫理学系では、「**職業としての医療**」にどんな倫理が求められるのかそれが、人間の「あり方」とどう関係するのかわかることができるでしょう。また法学系は、「**医療の世界**」が診察室や病室、手術室に限られるものではなく、実はひろく、社会とつながっていることを教えてくれるでしょう。こうして多様な視点から、「**医療**」と「**人間**」への洞察を深め、「**体験の経験化**」をはかることで、「**専門医療従事者になる**」意味をつかみとり、責任を自覚してゆくことも可能になる。人間科学教育課程はそのための「**場**」であるとしていられるのです。

日本で唯一の教養部

化学



対一のノート面接



金属イオンの分析実験

本学の学生生活は教養部からはじまります。教養部で今年行っている授業の一部を千葉県市川市の国府台キャンパスからご紹介します。

実験紹介  
化学 助手 勝又 敏行

入学して一番はじめに行う実験が化学実験です。「9時まで残される」、「レポートが大変」、「などいろいろ先輩におどかされて最初の授業に臨んでくるようです。そこに一人一セットの実験器具が与えられ、危険な物質を扱うこと、「一人一人て責任を持つ」こと、「一次記録の取り方、レポートの書き方などを最初に指導されます。」「自分に実験がうまくできるかどうかすこく不安」と思う学生も少なくありません。しかし、いざ実験をはじめると高校

のときまでのグループ実験とは違い、自分の自由に実験が進められることに気づきます。「テキストには書いていないけれど、この試料にこの試薬を入れたらどうなるだろう?」などと脇道にそれながら、周りの友人達と情報交換をしながら実験をすすめていくようになるのです。その結果は教官との対一の面接で活発に議論されます。「夢中になって時間を忘れる」、「大変だけど充実した」実験の時間をとおして「考える力」、「一人一人て責任を持つ」ことを身に付けていくのが化学実験です。

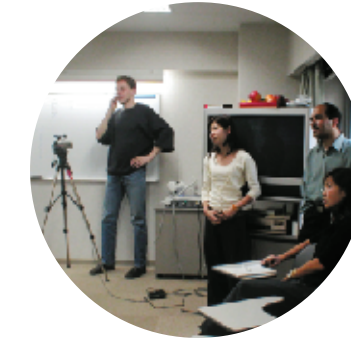
複合領域コース  
3大学間共通コース (医歯大・東工大・一橋大)  
①総合生命科学コース  
②海外協力コース  
③生活空間研究コース  
2大学間コース  
①医用工学コース (医歯大・東工大)  
②医療・介護・経済コース (医歯大・一橋大)

平成14年度東京医科歯科大学の入学式が、4月8日(月)午前10時から本学講堂で行われました。新入生250名(医学科8名・保健衛生学科101名・歯学科67名)が、専門の医療人をめざして、その第一歩をスタートしました。

また、4月9日(火)午後1時から本学講堂で大学院入学式が行われ、医歯学総合研究科(修士課程31名・博士課程237名)、保健衛生学研究科(前期課程31名・後期課程15名)に314名が進級しました。



鈴木学長による入学許可の告示



ロールプレイを通して自然な会話を練習する留学生



マルチメディア室で聴解訓練を行う留学生



マルチメディア室で日本語ワープロとオンライン辞書機能を学習する留学生

留学生相談室  
2001年4月センターに留学生相談室が開設され、1年間に25ヶ国の留学生等から延べ162件の相談がありました。相談内容は、修学関係、学外諸手続き、奨学金・宿舎、人間関係等広範囲に渡る内容でした。

International Student Center 留学生センター

日本語教室からのお知らせ  
4月はじめに日本語クラス受講希望者に対してプレースメントテストが行われ、58名が受験しました。4月15日からは、前期の日本語13コース(初級)上級、聴解、医学事情)が始まり、約80名の留学生が研究の合間をぬって、熱心に日本語を勉強しています。留学生センターではマルチメディア室での聴解指導やコンピュータ支援による最新の語学教授法を取り入れ、効果的な日本語教育を行っています。

「英語による学会発表準備コース」開講のお知らせ  
国際学会での英語による発表を目指す留学生と日本人大学院生を対象に、「学会発表準備コース」を開講します。第2期の授業は7月8日から始まります。詳しくは留学生センターまで。

外国人留学生在籍者数 226人 (2002年5月1日現在本学に在籍する外国人留学生の数)  
39ヶ国・地域で、全学生の約 割です。

5月新任教官着任  
大北葉子助教授(日本語教育)が(シンガポール国立大学より)着任。

- 留学生センター教官のオフィス・アワー
- 【山下】木・4:30-6:00 (留学生センター)
  - 【都河】月・火・木・1:30-4:30 (留学生センター)
  - 【増田】木・2:00-3:30 (教養部一号館三階)
  - 【泉谷】火・1:00-2:30 (五号館二階)
  - 【大北】金・3:00-4:30 (留学生センター)

留学生センターホームページ [http://www.tmd.ac.jp/isc/index\\_j.htm](http://www.tmd.ac.jp/isc/index_j.htm)